

指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

冬季休業中
に記入



教科名	国 語
-----	-----

	指導方法の課題分析 (学習における児童の実態等)	具体的な授業改善策	改善状況 ◎○△ 特記事項
第1学年	- 平仮名の読み書きが不十分で、文章の意味を正しく理解できていない児童がいる。また、設問の意味を読み取れず、記憶を頼りに思いつきで答えることもある。 - 一斉指導において、聞く力が弱く、自分ごとと捉えられない児童がいる。	- 読み聞かせの時間を週に1回程度もち、読書を通して文章に慣れることで、豊かに想像する力を育てる。 - 文字の学習に年間を通して継続的に取り組む。 - ハンドサイン等で反応したり、聞いたことや考えたことを伝え合ったりする活動を、年間を通して入れていく。	
第2学年	- 句読点の使用、主語と述語など、1文を正しく書く力が不十分である。また、段落などのマスの使い方を正しく理解できていない。 - 聞かれていることや意味を理解して、答えることができない児童が多い。	- 読書の時間を充実させ、多くの語句や表現に触れさせる。 - 短い文を作る活動について、間違いやすい例や正しい文の例を、話合う活動や ICT 機器の活用を通して、繰り返し共有する。 - 何について聞かれているかを、都度確認する。	
第3学年	- 既習漢字を日常で活用する力が不十分である。 - 句読点不足や、助詞「てにをは」のねじれなどが見られる。	- 既習漢字の個別最適な学びとして、筆順を色分けした個別指導で重点的に学習する。発展的な学習では、漢字を使った文章作成をし、児童同士で教え合ったり、グループで漢字に取り組んだりして相互学習を促す。 - 基本的な文法や語彙を丁寧に教え、基礎的な文章構成を練習する機会を設ける。	
第4学年	- 漢字を書いたり、文章の中で使ったりする力が不十分である。 - 筋道立てて考える力が不十分である。 - 自分の思いや考えをまとめて、言葉に表す力が不十分である。	- 日常的に文章を書き、習った漢字を使うようにさせる。 - 出した問いに対して、なぜそのように考えたか、根拠をもたせるようにする。	
第5学年	全体的に筋道を立てて文章を作る力に課題が見られる。登場人物や筆者の思いや意図をくみ取り、自分と重ね合わせて考えている児童が少ない。	自分の考え等を書く時間を多く設ける。様々な問いに対して、自分と重ねさせて考えさせる発問をする。また、他教科でも、振り返りなど書く時間を設け、書くことに関して抵抗をなくしていく。自分の考えを交流し、書くことの楽しさを味わわせていく。	
第6学年	- 読解では、本文の内容を正確に読み取る力にばらつきがある。 - 書く活動では、理由や根拠を明確に書くことが難しい児童が多い。	- 発問の精選と系統化を図る。登場人物の思いを言動・行動、情景などの描写から読み取れるようにする。叙述をもとに、児童が場面や段落に着目をして、根拠をもって思考する習慣を育てる。 - 思考を整理することを重視し、構成メモや思考ツールを活用し、考えを視覚的に整理することで論理的な文章構成ができるようにする。	

指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

冬季休業中
に記入



教科名	算 数
-----	-----

	指導方法の課題分析 (学習における児童の実態等)	具体的な授業改善策	改善状況 ◎○△
			特記事項
第1学年	・計算はできるが、式の意味の理解が不十分な児童がいる。 ・文章題では、問題を読み取る力の不足が原因で、正しく立式できていないことがある。	・キーワードを整理しながら、繰り返し式と意味を結び付ける学習経験をさせ、多くの問題に触れ、身に付けさせていく。 ・文章題を図や絵で表し、視覚的に分かるようにする。自分なりに図などで表す経験を積ませる。	
第2学年	・時刻と時間を正確に読むことや長さや水のかさの量感、単位換算が苦手な児童が多い。 ・自分の考えを図や絵、言葉を用いて説明する力が育ってきているが、簡潔に分かりやすくまとめる力が不十分である。	・生活場面の中で学習したことを生かせるように、日常的に時刻や時間、長さや水のかさを意識した活動を取り入れる。 ・学習課題を受けて、自分の考えを書く時間を設ける。簡潔に分かりやすく書けている児童のノートを写し、共有する機会を多く作る。	
第3学年	・繰り下がりのひき算やかけ算九九など、既習事項の理解が不十分であり、該当単元の学習に自信がもてない様子が見られる。 ・問いを理解することと、知識技能を生かして問題を解決することに課題がある。	・単元の導入時に児童の実態に応じて、既習事項の振り返り、問題演習を行う。 ・問われている場面を視覚化して理解しやすくしたり、数値を考えやすいものに置き換えたりすることで児童が文章題に取り組みやすくする。	
第4学年	・既習事項を生かして、問題解決をすることが苦手な児童が多い。 ・解決の過程や結果を多面的に捉え、考察することに苦手意識をもつ児童が多い。	・文章問題で使われる数値や求めることの確認をして、何を求めるのかを明確にするとともに、答えを出すことだけを重視せず、なぜそのように考えたか、どうしてそのように言えるかを、図や既習事項などの根拠をもって表したり説明したりする時間を設ける。	
第5学年	・計算ができる児童が多いが、立式に困難が見られる児童が多い。問題把握がしきれずに立式に取り組んでいる児童が目立つ。問題文から数直線やテープ図など課題解決するためのツールを活用しきれないことが原因であると考ええる。	・問題文を読み、自力解決の時間に数直線や図を使って解く時間を設ける。問題把握の時間を多く設けることで児童のつまづきを確認し、形成的に個別対応していく。	
第6学年	・「なぜそう考えるのか」、「どのように考えたのか」を言葉で説明する力に課題が見られる。立式をする際直感的・一面的な理解にとどまり、理由や根拠を明確に表現することが難しい。	・多様な考えに触れる活動の充実を図るために同じ問題に対して複数の考えがあることを意図的に提示し、クラス全体で比較・検討する場を設ける。児童の考えを黒板や電子黒板に一覧化し、各考えについて筋道を立てて、根拠をもって伝えられるようにする。式を区切ったり、きまりを押さえたりしながら取り組む。	